

## 【余滴】 コンスタンティヌス大帝1700周年記念 関連貨幣・切手資料紹介：今年は何の年？

豊田 浩志

といっても、干支の話ではない。一昨年や昨年（2012、2013年）、さらには私などもうこの世にいないはずの2025年や2037年は、西欧世界の自意識にとってかなり重視されているメルクマールな年なのである。

じつは先行して2006年はイギリスのヨークで、2007年はドイツのトリーアで街おこしを兼ねた記念祭が華々しく挙行されていた。

それをあらかじめ知っていたわけではない。2007年夏、我々がそのころ恒例化していた夏休みのレンタカーでのローマ遺跡見学の訪問先に選んだのが、たまたまイギリスとスイス・オランダ・ドイツ・オーストリアだった。イギリスではハドリアヌスとアントニヌス=ピウスの長城、ライン・ドナウ流域ではリメスといった、ローマ帝国の北辺国境の踏破が主目的だった。ロンドンからレンタカーで北上したので、ヨークも通過したはずだが立ち寄るとい認識はなかった。記念祭は前年だったから寄ったところでめばしいものはなかっただろうが（註1）。



(<http://home.ktroad.jp/kazumi-t/york/constanteine.html>)

ヨークのミンスター大聖堂前の1998年製作のコンスタンティヌス青銅像  
：彼はこの場所で皇帝歓呼を受けたとの伝承がある。

トリーアでは不意打ちでその記念祭に遭遇することになる。ポルタ・ニグラの北面前には仮設舞台と観客席が設えられて、えらく賑やかで色んな催し物してるんだな～、とノー天気なお上りさん状態。あちらも夏休みでイベントたけなわの時期だったわけで、隣接した市立博物館 Stadtmuseum Simeonstift Trier での特別展覧会を群れなす現地の人たちに混じって行列して参観し、その内容のあまりの充実度に度肝を抜かれ――圧巻は3Dで作製のコンスタンティヌス座像：ローマの彼のバシリカ内に設置されたものの復元像だった――、ミュージアム・グッズ売り場で分厚くて重いカタログを立ち読みして、ようやくああそうだった、と気づく始末。ドイツなので会場の撮影は禁止なのがストレスだった。

そのときの記憶を想起すべくウェブで検索すると、トリーアのキャッチフレーズは「古代遺跡とマルクスの街」。思いのほかこじんまりした静謐で清潔な都市空間で、歩きに歩いて2日間の滞在でめばしいポイントは押さえることができた。

さて前置きが長くなったが、表題の問に答えよう。羅列した数字のうち13、25から、勘のいい人はすぐに思い当たるだろう。313年、325年である。2006年ヨークとは、306年にヨークの旧名エボラクム Eboracum で病没した父帝コンスタンティウスの軍によってコンスタンティヌスが皇帝（篡奪）宣言された年の1700年後であり、同様に2007年トリーアとは、307年に旧名アウグスタ・トレウェロルム Augusta Treverorum を父から継承して自分の本拠地とした年であった（註2）。しかも、である、マルクスの生誕年は1818年なので、期せずして1500年を経て西欧世界を真逆に牛耳った二大巨頭のそり踏みとなり、トリーアでは街おこしがまだまだ続くのである。さらにあまり知られていないが、ミラノ司教として著名なアンブロジウスも父の任地がここのとき生まれている。ちなみに337～340年ごろのことらしい（蛇足だが、アウグストゥス死後の反乱騒ぎで、ゲルマニクスの妻大アグリッピナと息子ガイウス・カリグラが一時滞在したこともある。cf., Tacitus, *Annal.*, I.40-41）。

となると、トリーアで1700年祭は21世紀半ばまで連綿と継続可能、ということだ。私にはそれを見届けることはとてもできそうもないが、目端の利いた出版社がそれを当て込んで大帝関係の書籍を編むのに余念がないので、その余祿でコンスタンティヌス研究が飛躍的に進むことを草葉の陰から祈りたいと思う（註3）。

なおイタリア各地での記念行事、とりわけローマでの催し、ミラノとローマの展覧会等、触れるべき行事は多いが、今は省略する（註4）。ウェブ検索すると、いわゆる東欧圏の正教会でのイベント情報にも接することができる（註5）。

ところで、本論である。トリーアにもう一度話題を転じよう。2007年、彼の地では通常の記念行事だけでは満足せず、なんと記念年の半年間通用する10ユーロ通貨まで発行したのだから畏れている。その実写はあまりに燦然と輝いて神々しすぎるので、わかりやすい調整画像を示しておこう。私はこのことを、やはりウェブ検索しているうちに、その筋では有名な

「FORVM ANCIENT COINS」のHP（<http://www.forumancientcoins.com/gallery/thumbnails.php?Album=1141>）で知り、現物もオークションで首尾よく入手できた。



(<http://www.lifepre.de/pressemitteilung/sparkasse-trier/Konstantinthalers/boxid/2047>)

貨幣面の打刻・デザイン等、貨幣学の伝統にしたがって記載すると、以下のようになる。

トリーア出土のコンスタンティヌス一世の、10ユーロ貨幣 Konstantinthalers

2007年発行

材質 プラスティック製

直径 30mm

厚さ 3.6mm

重さ 9gm

貨幣表面：人物像は向かって右向きで平服を着用し、月桂冠を被っている。銘文は以下である：

CONSTANTI NVS PF AVG (Constantinus Pius Felix Augustus)

「コンスタンティヌス 敬虔にして賢明 正帝」

貨幣裏面：中心デザインはボルタ・ニグラ、すなわち、現Trier（旧名Treveri）の、古代ローマ門が刻まれているが、そのような刻印貨幣は往事に存在していない。  
下方の数字の「10」は、10ユーロを意味する。銘文は以下。

KONSTANTINTHALER 2007 / SPARKASSE TRIER /  /  
CITY-INITIATIVE TRIER e.V.

「コンスタンティヌス・ターラー貨 2007年  
SPARKASSE TRIER銀行



〔銀行マーク〕

社団法人CITY-INITIATIVE TRIER」

すなわち、裏面デザインは、先行例の存在しない本貨幣独自のものである。

表面デザインは、実際に307年にトリーアで発行されたコンスタンティヌス貨幣をまねた複製、と想定するのが普通のはず。意匠的な特徴は、頭髪の分け方が月桂冠の上部で前方と後方で二分されていること、後頭部で月桂冠の結び目となっている紐の先端の一方は首筋後ろで釣り針上に跳ね上がっており、○印の装飾物が3つ確認されること、もう一方は肩に垂れたあと首のほうにL字型に描かれ、その先端に同様の3つの○印の装飾物が認められることだろう。ところが実物での確認が意外に難物で未だ見つけていない（ご存知の方からの情報を願っている）。

記念貨幣であるからには、トリーア造幣局で307年ごろ打刻された金貨から選ばれる可能性が一番高いはずである。筆者であればそうするからだ。しかし、かなりのTrier打刻金貨一覧を掲載しているオークション・リスト（[http://www.coinproject.com/search\\_emperor.php?type=3&emp=Constantine+I+%28The+Great%29&mint=Trier&sort=reference3&page=7](http://www.coinproject.com/search_emperor.php?type=3&emp=Constantine+I+%28The+Great%29&mint=Trier&sort=reference3&page=7)）でも、二玉ばかりである。

そんな中で唯一見つけたのが次の金貨である。銘文、打刻地、玉数等大筋合致しているが、頭髪の分け方が異なり、発行年代もかなり後である。



(<http://terrasinianicentcoins.com/store/products/category/showcase/>)

Constantine I 307/310-337 A.D. AV Solidus Trier (Treveri) Mint Struck 320 AD. 4.24g 19mm 6h  
OBV. CONSTAN TINVS P F AVG, Laureate head right. ; RIC VI 246; Alföldi 456; Depeyrot 27/3;  
Price: \$15,777.00

試しに、Follis貨幣もざっと見てみたが、むしろこちらのほうで三玉や頭髪で合致するものが多く、しかし銘文は末尾を「AVG」とするのが大半で、発行年代もかなり遅くなっている。

この10ユーロ貨幣は、ドイツ・トリーアの Sparkasse Trier 銀行によって発行され、その都市でのコンスタンティヌス皇帝居住1700年祭において、2007年5月6日から12月31日まで同都市内での流通貨幣だった。イベント終了後、2008年3月31日までは発行元銀行で10ユーロと交換可能だった由。

## 1) コイン・記念メダイオン

どうやら私には収集癖があるらしい。そういえば小学生時代に切手を集めていた時期があって、ささやかなものだがまだ手元にある。その後の書籍に関しては家人の怨嗟の的であり、研究室召し上げ目前の私の悩みの種でもある。創造性は捨てられない人間にこそ固有なのだ、と小声でつぶやくのみ。

古代ローマ史がらみの「モノ」を集め出したのはいつ頃だったろうか。私にでも手軽に購入できたのが、ローマ・コインだった(もちろん印税で潤う某女史のように金貨というわけにはいかない)。その後は授業の資料用のパピルス・獣皮紙などの書写材を集めだし、もちろん死海の水やシリア砂漠のチャート、ウェスビオ山の火山灰など、地域風土を特徴づける無難な拾いものも加わっていった。

最初は日本の、ついで海外のコイン業者から購入した。最近になってオークションにも参加するようになった。検索も送金も手軽にできるインターネット時代は、便利きわまりない。

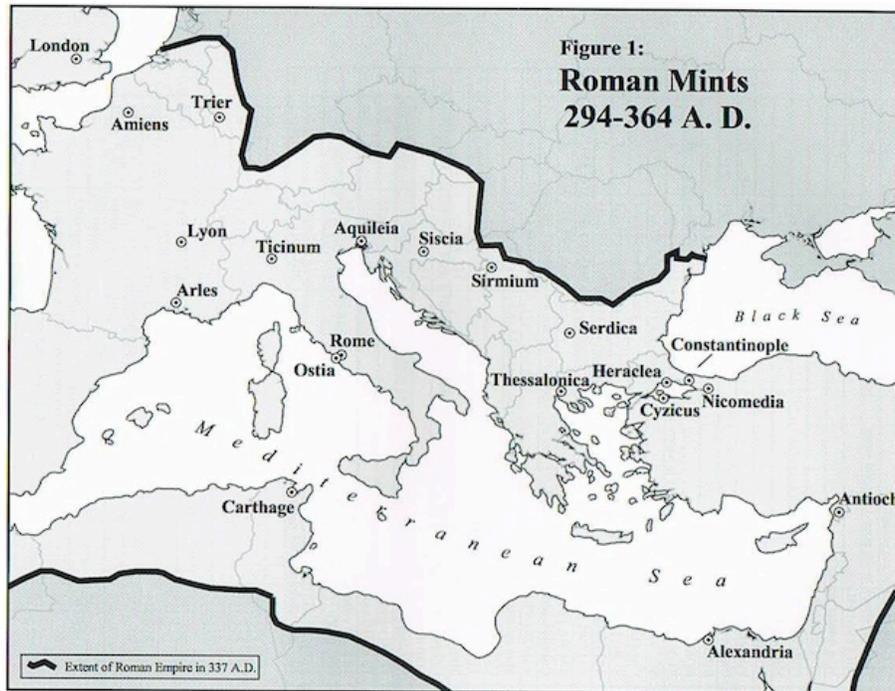
まず最低限の業界用語に触れておこう。古代ローマの帝国貨幣制度は、金貨・銀貨・青銅貨からなっていた。本稿で対象となる貨幣は青銅貨である(下記表のごとく、「銅貨」と表示される場合もある)。コンスタンティヌス時代以降の貨幣改革で、青銅貨の重量と大きさを基に、普通以下の四区分で表示される(註6)。

貨幣の種類	素材	重量 (目安)	大きさ (目安)
A E 1	銅 (Copper)	8 g 前後	25mm or 25mm~
A E 2	銅 (Copper)	5 g 前後	21mm~25mm
A E 3	銅 (Copper)	3 g 前後	17mm~21mm
A E 4	銅 (Copper)	1 g 前後	~17mm

帝国内にはこの時期、帝国造幣所が総計で20カ所存在したことが分かっている(もちろん統廃合や休止もあったし、別に貨幣打刻権を認められた属州都市もあって、そこでは庶民が日常的に使用する青銅貨・銅貨が生産されていた)。コンスタンティノポリス造幣所は326年から稼働し始める。最初は工房A・Bのみだったが、327年にまずΓ、そしてΔ・E・S・Z、さらに330年にH・Θ・I・IAが増設されて、総計11を数えるに至る。いつもフル稼働していたわけではない他とは異なり、さすがに首都機能を支える造幣所だけあって、ここは341年に一斉休業した以外は絶え間なくどこかの工房が稼働していた。ただ、361年以降は、A・B・Γ・Δの4つのみであったが(註7)。

ちなみに、当該時代における他の帝国造幣所の工房の最大数のみを以下列挙しておこう(註8)。これからだけでも、帝国東西における貨幣経済の実質的浸透度の違いをおのずと示しているようで興味深い、と思うのは筆者だけであろうか。

Londinvm (London)	1	Siscia	6
Ambianvm (Amiens)	1	Sirmivm	2
Treveri (Trier)	3	Serdica	5
Lvgdvnvm (Lyon)	2	Thessalonica	6
Arelate (Arles)	4	Heraclea	6
Ticinvm (Ticinum)	4	Nicomedia	10
Ostia	4	Cvzicvs (Cyzicus)	9
Carthago	4	Constantinopolis	11
Roma	9	Antiochia (Antioch)	15
Aquileia (Aquileia)	3	Alexandria	8



こうしてみると、首都機能をもっていた主要都市の中でもコンスタンティノポリスは、アンティオケイアに次ぎ、ニコメディアとローマを凌ぐ存在だったことがわかる。

**a) 古代ローマ貨幣：312年ミルウィウス橋戦勝記念青銅貨**

ミルウィウス橋でのコンスタンティヌスの勝利を記念したものに、以下がある。まずは、筆者が入手できたものから触れておこう。

筆者ごときに入手可能な歴史的意義を有する記念コインは、市場的にもそうあるわけではないので、312年記念と目されていたこの貨幣を、たまたまウェブの「Show10goo CoinShop」が18,000円で販売しているのをみつけ、驚喜して購入した。届いたコインは期待に反して実にちっぽけで、一昔前の5g以上・直径20mm以上はあってずっしり手応えがあったFollis青銅貨と比べると、とても記念貨幣とは思えない代物だった。それが以下の01である。なお、画像の縮尺は紙面構成の都合上一定していないことをお断りしておく。

01：AE4（直径12.71-13.26mm, 重さ1.04g） コンスタンティノポリス造幣所、「IA」  
＝第11工房製作。業者想定発行年は、337-340年。



(<http://www.show10goo.com/shop2/c20070014.html>)

【解説】 参考番号：RIC, VIII 21 - C3.

表面銘文・意匠：POP(ulus) ROMANVS =ローマ市民

左向きで着衣の若い男性像は、ローマ市民を象徴する守護霊 *genus* で、左肩に豊穡の角 *cornucopia*。

裏面銘文・意匠：ティベル川にかかる *Milvius* 橋、両端にアーチを有する塔門が立ち（現在は対岸のみ；なお、本品では明確でないが、他ではその屋上に右に2ないし3、左に3つといった具合に球状裝飾物が認められる）、それをつなぐ橋げた上に手すり（X印が5つ）、橋げた下の両端に橋脚（ないし浮き船）、その間に水流が3つ描かれている。中央の刻文は、CONS(*tantinopolis*) IA (= No.11)、すなわち、「コンスタンティノポリス造幣所、第11工房」。

その後、この件でもっぱら「*Classical Numismatic Group, Inc.*」のオークションに4回ほど参加したが悉く失敗した。というのも、まずはメ切りが米国東海岸時間なので効果的に対処できなかったこと、1700周年がらみの時期だったので、注目度が高かったためか、出品者見積評価が100ないし150ドル程度でも、あっという間に倍に跳ね上がるのが常で、落札価格で900ドルの値がつくものも出る始末だった。先般5回目のチャレンジで業者「*VAuctions*」からようやく145ドルで落札できたが（下記06）、送料以外に業者手数料も上乗せされ、実際の支払いは170ドル。以下、その戦歴の記録でもある。データ表記は大同小異なので（註9）、特記事項のみ記す。基本的には希少なものだが、時期が幸いして出物が多かったようだ。以下、05まで「*Classical Numismatic Group, Inc.*」出品のもの。

02 : AE (14mm, 1.06g, 1h) 「I」 = 第10工房 2013/5 \$ 900  
<http://www.cngcoins.com/Coin.aspx?CoinID=234269>



本品について業者は、発行330~354年、打刻330年と表記している（この業者はどれにもそう書いていて、しかし他は評価額\$100のところ、本品には05ともども\$150をつけていた）。本品は微量とはいえ銀を含有したBillonで、コンスタンティノポリス落成の記念品として330年に限定発行、その後、一般流通用の同型青銅貨が354年まで発行され続けた、という鑑定なのだろうか。

なお、本品の裏面には尖端による打撃痕あり。塔門上には右に2つ、左に3つといった具合の球状物、塔門のアーチは中央に向かって膨らんでいて、手すりのXは4、水流は右橋脚の下に2、橋脚間に4。

03 : AE (14mm, 1.06g, 1h) 「Γ」 = 第3工房 2013/11 \$ 280  
<http://www.cngcoins.com/Coin.aspx?CoinID=246147>



彫りも明確で、グリーン・パティナが美しく、一番ほしかったもの。塔門上の球状物は左右2つずつ、アーチは正面向き、塔門外側に五段ずつ階段状構造物、手すりのXは6、水流は橋脚間6ないし7、右橋脚下に1。

以下、意匠の詳細検討は省いて羅列する。

04 : AE (14mm, 1.03g, 11h) 「Z」 = 第7工房 2013/11 \$ 260  
<http://www.cngcoins.com/Coin.aspx?CoinID=246148>



05 : AE (14mm, 1.20g, 6h) 「Θ」 = 第9工房 2014/2 \$ 575  
<http://www.cngcoins.com/Coin.aspx?CoinID=252024>



06 : AE (14.57mm, 1.08g) 「E」 = 第5工房 2014/3 \$ 145  
<http://www.vauctions.com/ViewArchiveItem.asp?id=22198>

これは業者「VAuctions」によるので、データ表記が異なり発行年は330年、と。彫りが浅く、平べったい印象がある。



07 : AE (14mm, 1.25 g, 12h) 「B」 = 第2工房 2014/3 \$ 360  
<http://www.cngcoins.com/Coin.aspx?CoinID=254388>







ここの工房番号は明確に「IA」と読める。

13 : AE4 データ記載なし 「E」 = 第5工房

<http://www.lunalucifera.com/Roman/6Constantinian/CityCommem.html>



この書き手は、従来説とひと味ちがう見解を述べている。前面のゲヌス *genus* は帝都ローマではなく全帝国のローマ市民を示していて、この貨幣シリーズは、かの都市の諸記念に続いて、341~346年からコンスタンティノポリス造幣所のみで打刻された、と。前半はすぐ首肯できる。後半での彼の本意はどうやら、コンスタンティヌスはローマからコンスタンティノポリスへの首都移行を記念すべく新貨幣シリーズを330~341年に発行したが、その後341年~346年にこの橋シリーズが発行された、ということらしい。その後「ローマ建国1100年記念」年の347/8年が訪れる。

14 : (14.37mm, 1.2g) 「I」 = 第10工房

<http://www.ancientimports.com/cgi-bin/lotinfo.pl?id=17663>



15 : (14mm, 1.0gm)

「Z」 = 第7工房

\$ 325

[http://www.vcoins.com/en/stores/sergey\\_nechayev\\_ancient\\_coins/200/product/constantine\\_the\\_great\\_commemorative\\_issues\\_330346\\_ad\\_malvian\\_bridge/419922/Default.aspx](http://www.vcoins.com/en/stores/sergey_nechayev_ancient_coins/200/product/constantine_the_great_commemorative_issues_330346_ad_malvian_bridge/419922/Default.aspx)



裏面刻文は筆者には「COOS/Z」としか読めないが、書き手は「CONS/O」=第9工房とし、だが「Malvian Bridge勝利の311ADの記念貨幣、Bronze As、330~337年ローマ打刻」などと表記していて、誤りも多いようだ。むしろ同時代の偽貨幣か。

16 : AE (14mm, 1.0g). Struck 330 AD. 「S」 = 第6工房 \$ 115  
[http://www.vcoins.com/en/stores/roys\\_coins/141/product/pop\\_romanus\\_constantinople\\_commemorative\\_bridge\\_cons/462550/Default.aspx](http://www.vcoins.com/en/stores/roys_coins/141/product/pop_romanus_constantinople_commemorative_bridge_cons/462550/Default.aspx)



以下、No.27までは「acsearch.info」掲載のもの。打刻年はすべて330年。出展者の記述には、*RIC*の巻数をVIIとするなど、表示に基本的間違いが散見されるので、注意を要する。

17 : AE4 (13.7mm, 1.15g, 0°) 「IA」 = 第11工房 売価不明  
<http://www.acsearch.info/search.html?search=similar%3A210495#0>



18 : AE4 (14.0mm, 0.981g, 0°) 「...」 = 不明 売価不明  
<http://www.acsearch.info/search.html?search=similar%3A210495#1>



19 : AE4 (13.8mm, 1.038g, 0°) 「...」 = 不明 売価不明  
<http://www.acsearch.info/search.html?search=similar%3A210495#2>



20 : AE4 (14.0mm, 1.03g, 12h) 「Δ」 = 第4工房 \$ 114  
<http://www.acsearch.info/search.html?search=similar%3A210495#3>



21 : AE4 (15.0mm, 3.03g) 「...」 = 不明 \$ 41  
<http://www.acsearch.info/search.html?search=similar%3A210495#5>



22 : AE4 (12.0mm, 0.77g, 12h) 「Α」 = 第1工房 \$ 11  
<http://www.acsearch.info/search.html?search=similar%3A210495#6>



23 : AE4 (14.0mm, 1.00g) 「Θ」 = 第9工房 \$ 65  
<http://www.acsearch.info/search.html?search=similar%3A210495#7>



24 : AE4 (14.0mm, 1.4g) 「Ι」 = 第10工房 \$ 82  
<http://www.acsearch.info/search.html?search=similar%3A210495#8>



25 : AE4 (14.0mm, 1.10g, 11h) 「I」 = 第10工房 \$ 52  
<http://www.acsearch.info/search.html?search=similar%3A210495#10>



26 : AE4 (14.0mm, 1.0g) 「B」 = 第2工房 \$ 79  
<http://www.acsearch.info/search.html?search=similar%3A210495#12>



27 : AE (1.50g) 「B」 = 第2工房 \$ 220  
<http://www.acsearch.info/search.html?search=similar%3A210495#13>



なぜか皇母ヘレナ (†328) や、Genius I世が登場する摩訶不思議な解説つき。

28 : AE (13mm, 1.13 g, 12h) 「A」 = 第1工房 2014/4/11追加 \$ 320  
<http://www.cngcoins.com/Coin.aspx?CoinID=257981>



### 【分析】

現段階での収集総数28。工房ごとの一覧は以下。

第1工房 2；第2工房 3；第3工房 1；第4工房 1；第5工房 3；第6工房 1；

第7工房 3；第8工房 1；第9工房 2；第10工房 5；第11工房 3；不明 3

同じコンスタンティノポリス造幣所の、しかもおそらく同時期の製品であるにもかかわらず、同一工房においても同一金型での製作品は28例中では皆無のようである。その識別ポイントに、表側の人物像の印象の他、裏面で多くの差異が見て取れるからだ。塔門上の装飾物の数、塔門の表現方法、手すりの「X」印数、水流の数・描き方等々。

たしかにこの意匠は裏面の「CONS」刻印によってコンスタンティノポリス造幣所のみオリジナルが明確であるが（よって書き手はほぼこぞって、330年5月11日の新都コンスタンティノポリス落成記念貨幣としている）、他方で裏面の特徴的な図案はミルウィウス橋と想定されてきた。すなわち312年10月28日の、コンスタンティヌス大帝対マクセンティウス戦の勝敗を決した場所である。新首都建設のテーマにより即応した意匠や（表面に女神コンスタンティノポリス、裏面に女神ウクトリアなど：下図参照）、古都ローマとの併存強調には別の意匠があるので、なにを好んでミルウィウス橋が採用されたのか、疑問。よもや単純に、両都をつなぐ橋という暗示ではないだろう。筆者的にはそのほうがよほどおもしろいだけだ。



([http://www.wildwinds.com/coins/ric/city\\_commemoratives/t.html](http://www.wildwinds.com/coins/ric/city_commemoratives/t.html))

Vagi, vol. II, pp. 529-532は、奇妙な区分を提示している。実は、表面のみ同型で、裏面は、周縁の月桂輪の中心部に「✱」印を置き、その下に「CONS」と発行造幣所コンスタンティノポリスを、そしてそれに続いて工房番号を打刻した貨幣（RIC, VIII 22, p. 448：下図参照）もあるのだが、こちらは新都コンスタンティノポリスに献じられたものに分類し、他方、裏面が橋のほうはというと、古都ローマに分類しているのである。一見もっともらしい解釈であるが、それならば裏面の刻印が両者とも「CONS」であるのが解せなくなる。表面の若さ溢れる青年像を古都ローマとするよりは、前掲13の書き手が指摘しているように、帝国内のローマ市民全体を象徴していると考えたほうがよほど論理的に思える。



AE4 (1.09g, 13.9mm, 180°) 「CONSE」 = Constantinopolis、第5工房  
(<http://www.acsearch.info/search.html?search=similar%3A210495#9>)

発行時期表示については、330～354年と330年の併記は、まずピロンによる記念貨幣が330年に打刻され、その後、一般に流布すべく同型の青銅貨が発行され続けた、という認識でいいとして、なぜシリーズの終わりが354年なのか、筆者にとってその根拠は不明である。

なお、参考事例を1つ挙げておく。橋をテーマにした貨幣意匠に、たとえばトラヤヌス時代にドナウ川に架けられた橋があって、塔門上の造形物はなんと3つで、両脇のトロパイオン（勝利の記念碑）に囲まれた勝利の女神ウィクトリアらしき全身像が想定されているようで、興味深い。



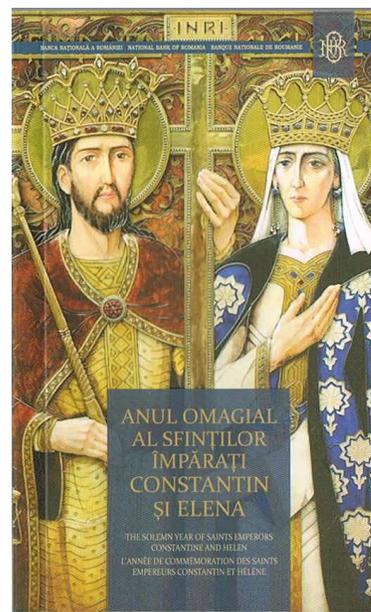
Sestertius (33mm, 25.59 g, 6h). Roma,  
Struck circa AD 104-107  
(<http://www.cngcoins.com/Coin.aspx?CoinID=169807>)



復原想像図  
(<http://romanianhistoryandculture.webs.com/decebaluandtrajan.htm>)

さて、以下は古代ローマのものではないので、【余滴】の【余滴】かもしれない。しかし、それなりに古代伝承に依存しなければならない現代的な事情がかいま見えるようで、筆者には興味深く思えるのである。

**b) ルーマニア発行10レイLei記念銀貨**（2013/5/20発行） 純度99.90%、37mm、31.103g、500枚限定（eBay価格で\$227）



表面：ブカレストの総主教座聖堂（聖コンスタンティヌスと聖ヘレナが保護聖人）、ルーマニアの紋章。アーチ内に銘文「ルーマニア」、額面10レイと、発行年2013年。

裏面：ブカレストの総主教座聖堂内の壁面画、聖コンスタンティヌスと聖ヘレナを描いたイメージ。銘文「ANUL OMAGIAL AL SFINTILOR IMPARATI Constantin si Elena」（聖皇帝コンスタンティヌスと聖ヘレナ記念年）、そして「Mediolanum 313」（メディオラヌム 313）、すなわち寛容勅令が發布された場所と年。

今般打刻された記念銀貨である。ルーマニアから解説の小冊子（上掲右：ルーマニア語・英語・フランス語併記で98ページ、2013年刊）と共に届いたが、画像はすべて違うものを掲載し、画像の小見出しも三カ国語を併記するなど、工夫が凝らされていて、なかなかいき届いていて好感が持てる。ちなみにそれに記された筆者取得コイン・ナンバーはNo.0000289。

補足すると、ルーマニア正教会は2013年を「聖コンスタンティヌスと聖ヘレナ」記念年と宣言し、各種の記念行事をおこなった（後述 g）、及び註5参照）。その一環の記念貨幣である。ウェブ検索すると額面500Lei金貨画像もヒットしたが、それに関して筆者に情報は無い。

ルーマニアは、聖ヘレナの生誕地でも何でもないのに、コンスタンティヌスとのこの時期における組み合わせは、彼女の聖地巡礼・聖遺物発見にかかわる純粋にキリスト教的な宗教的な意味合いなのであろう。

### c) ローマ市主催の312年ミルウィウス橋での戦い1700年記念祝賀行事（2012/10/27～12/2）のパンフの表紙

今回製作されたと思われる記念メダイオンの写真が掲載されていて、目を引いた。



その外円周にはイタリア語で「312d.C. XVII CENTENARIO DELLA VITTORIA DI COSTANTINO A PONTE MILVIO」（後312年、ミルウィウス橋でのコンスタンティヌスの勝利の1700年記念日）と刻印されている。注記として同様にイタリア語で「A. Vecchio, la battaglia di ponte Milvio. Medaglia commemorativa di Roma Capitale per il Natale di Roma 2012, rovescio」（A. Vecchio, ミルウィウス橋の戦い、首都ローマによる記念の、ローマ創設に関して、2012年の、裏面）なる文言も付されている。

ただし、現物を確かめようとウェブ検索を試みたがヒットはしなかった。

#### d) その他：百年前の資料、他

検索で偶然見つけたものを以下列挙する。いずれも1世紀前の記念メダイオンである。切手類には見当たらなかった。

01：ピウス10世下での1600年記念の大型銀製メダイオン（直径6.7cm）



表面は、中央の円内にピウス10世の右向き胸像、その頭上の小円内に「キー・ロー」のシンボル、同様外円上の西・南・東に、聖メルキアデス教皇（32代：311～314年）、聖シルヴェステル教皇（33代：314～335年）、聖マルクス教皇（34代：336年）、すなわちコンスタンティヌスの治世年にほぼ該当する教皇3名が描かれている。教皇名の同定はそれぞれ円の外縁部に小さな刻印で記されているので判明する。なお、ピウス10世胸像を取り巻く環状帯部には以下のように文字が刻印されている：上部左から「[聖メルキアデス左向き胸像]・PIVS・X・[キー・ロー]・PONT・M・」（ピウス10世・大神祇官）、下部左から「・AN・CH・[シルヴェステル正面向き胸像]・MCMXIII・[マルクスやや右向き胸像]」（キリスト紀元1913年）。

裏面は、皇帝がミラノ勅令をキリスト教徒に示している様子が描かれ、下部には3行にわたって以下の文字が刻まれている：「PACE・ET・LIBERTATE・ECCLESIAE/CONSTANTINI・MAGNI EDICTO/ CONSTITVTA/A・CH・CCCXIII」（教会の平和と自由のため/コンスタンティヌス大帝の勅令によって/制定された/キリスト紀元313年に）。なお、図像と文字の境目左端に小さく「S. JOHNSON」なる刻印がみえる。

なお、ピウス10世で思い出されるのは、彼がこのときまた Prima Porta の高台のアウグストゥスの妻リウィアの別荘の崖下に、312年 Saxa Rubra（両軍最初の激突地。ちなみに奇しくも「赤壁」の意味。ミルウィウス橋は最終段階の交戦場所で、敵将マクセンティウス戦死の現場だった）での対マクセンティウス戦勝利顕彰ラテン語碑文を掲げさせたことで、その当時のコンスタンティヌス称揚の程を知ることができよう。これについては後日詳報する機会を持ちたい。場所は国鉄（FS）ノルド線プリマ・ポルタ駅下車して正面やや左手前方の、建物の隙間にすでに見ることができる。白大理石銘文は筆者撮影時の朝は反射で見えにくかったので、今回はウェブからタ

方撮影のものを拝借した（註11）。その崖の直下の区画には、中世のニンフェオの遺構も保存されている。



(<http://www.mauriziolicata.com/2013/02/la-lapide-commemorativa-di-piazza-saxa.html>)

## 02：ピウス10世下での1600年記念の中型銀製メダイオン（直径4.4cm）



表面は、上部中央に教皇、その下にコンスタンティヌス（ラバルム奉持）と皇母ヘレナ（聖十字架奉持）、下部にサン・ピエトロ大聖堂と広場を描いたもの。各人のコーナーにそれぞれ「PIVS・X・PONT・MAX・」「CONSTANTIN・」「STĀ・HELENA・」、後者2つの上部には「CCCXIII」（313）と「MCMXIII」（1913）、他に左右端にそれぞれ「DEP.」「KISSING」の刻印が認められる。

裏面は、玉座に座す教皇シルヴェステルの前で跪き、「平和の勅令」＝「ミラノ勅令」を渡すコンスタンティヌスが描かれている。周囲には以下の刻印：「XVI・PLENO・SAECVLO・AB・EDICTO・PACIS・CONSTANTINIANAE・PRO・ECCLESIA・」（満16世紀目の記念に、コンスタンティヌスの平和の勅令から、教会のための）。

### 03：ピウス10世下での1600年記念の小型銀製メダイオン（直径3cm）



表面は上記02と同じ。

裏面は、上部の雲間に輝いている十字架。それを中央部で指さす如くに左手を伸ばしている皇帝像。彼の右手から左端に向けて、ミルウィウス橋とそれを見下ろす丘に張られた軍団テント群。十字架の外縁部には消えかかっているが「IN HOC SIGNO VINCES」（この印にて勝て）の刻印。

上の中型と比較すると、だいぶ摩滅していて使用感がある。小型だけにかつての持ち主が身につけていた証しだろう。いずれにせよ、確認できただけで三種類のメダイオンを取りそろえている意気込みは、バチカンが抱いていた時代への危機感を彷彿させるに十分であろう。じっさい、イタリア王国が教皇領を没収し、ピウス9世以降の教皇が「バチカンの囚人」となったのは1870年で、ピウス11世とムツソリーニによってラテラノ条約が結ばれて、バチカン市国が成立したのは1929年、すなわち「1600年記念祭」はその16年前のことだった（註12）。

時代が流れ、さてバチカン市国は今回果たしてこういった類いのメダイオンを作製したのだろうか。管見の限りでは見当たらない。2013年3月13日着座の新教皇フランシスコの下で、コンスタンティヌス評価も大幅に見直される予感がする。

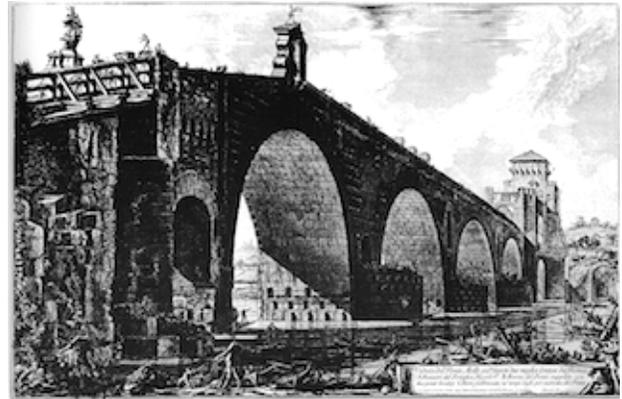
### 04：百年前の記念論文集

上智大学図書館で検索していてヒットした、ドイツ・ミュンスター大学記念論文集（請求記号DG:315:K6:1913）。



Herausgegeben von Franz Joseph Dölger, *Konstantin der Grosse und seine Zeit : gesammelte Studien : Festgabe zum Konstantins-Jubiläum 1913 und zum goldenen Priesterjubiläum von Mgr. Dr. A. de Waal / in Verbindung mit Freunden des deutschen Campo Santo in Rom*, Freiburg i.Br., 1913 .

05 : また、1991年発行のミルウィウス橋建造2100周年記念に発行の500リラ貨幣を入手したことも付記しておこう。



(<http://www.romeartlover.it/Vasi84.htm>)

この橋は前 220 年 Flaminus 街道開設をうけて、前 206 年にまず木造で建てられ、前 115 年に石造りになったが、それを前 109 年に M.Aemilius Scaurus が修復した (註 13)。このときの彼の仕事がまだ構造体の中に現存しているらしいが、どうやらその 2100 年祭のようだ。表側の図案は 19 世紀のピラネージの版画から採っているものの、中央に立つ鐘楼風装飾は今はない (cf., <http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/0/04/Piranesi-Ponte-Milvio.jp>)。

## 註

(註1) 後日、ヨークでの展示会のカタログを入手できた (E.Hartley et al., *Constantine the Great: York's Roman Emperor*, York, 2006)。その前書きによると、かの展示会は同様の構想と内容の三連続の国際展示会の一環で、最初が2005年イタリアのリミニ、次いでヨーク、最後がドイツのトリーアで、だが展示品は一部のみ重複するだけだったらしい。なお、リミニ、トリーアのカタログも入手済み。

(註2) 彼がかの地を去るのは316年で、以降、対リキニウス対策もあって、主として東部国境線を転戦する。コンスタンティノポリス建設開始は324年、公式奉獻式は330年。cf., T.D.Barnes, *The New Empire of Diocletian and Constantine*, Cambridge/Massachusetts and London, 1982, pp.68-80.

(註3) 一点、ミラノの王宮 Palazzo Reale で開催された展覧会も撮影禁止だったが、報道動画でその雰囲気を知ることができるし、リンクで展示物の一部画像も提供されている (<http://video.corriere.it/313-dc-mostre-milano-celebra-l-editto-tolleranza/fe37b56-1eb1-11e2-83ec-606b68a0023b>)。なお、本稿末尾の「補遺1 : 展覧会カタログ紹介」を参照のこと。

(註4) ご不審の向きは試しにグーグルで「IN HOC SIGNO VINCES」でヒットする画像検索をご覧ください。まだイタリア国内での催しの残り香をかぐことができるだけでなく、思わぬ発見にも接することができるだろう。なお、内容・価格で文字通り「玉」のトップに以下の記念編纂辞典を挙げてもいいだろう。”*I CLASSICI COSTANTINO I : Una enciclopedia internazionale sulla figura, il mito, la critica e la funzione dell'imperatore dell'editto di Milano 313-2013*, Treccani, Roma, 2013” ([http://www.treccani.it/catalogo/catalogo\\_prodotti/Le\\_edizioni\\_d\\_arte/costantino.html](http://www.treccani.it/catalogo/catalogo_prodotti/Le_edizioni_d_arte/costantino.html))。その入手では実に多くの方々にご協力いただいた。記して謝意を表す。

(註5) たとえばルーマニア正教会では、<http://ziarullumina.ro/religios/anul-sfintilor-imparati-constantin-si-elena> ; セルビア正教会は、[http://it.radiovaticana.va/news/2013/06/20/editto\\_di\\_costantino.\\_mons.\\_antonini:\\_in\\_serbia\\_occasione\\_di/it1-703345](http://it.radiovaticana.va/news/2013/06/20/editto_di_costantino._mons._antonini:_in_serbia_occasione_di/it1-703345) ; <http://www.ipsnews.net/2010/02/Balkans-moderate-patriarch-sets-new-course-for-serb-church/>。本稿p.29の【追加情報】も参照のこと。

(註6) 以下から転用した。<http://show10goo.com/goo/teikoku4-1.html> : 典拠的には、David Van Meter, *The Handbook of Roman Imperial Coins: A Complete Guide to the History, Types and Values of Roman Imperial*

Coinage, Utica, 1991, p.15)。なお、コインのデータに、ままだ「h1」とか「180°」といった表示がみられることがある。筆者にとって不明だったが、「show 10goo」の上永稔氏より大略以下のご教示を得たので、記して謝意とする。「hはコイン表と裏のデザインの位置がどの程度の角度でずれて打刻されているかを意味します。この表現方法をクロックポジションと言い、その場合、時刻を用いると「h」が、方位の場合は「°」が使われます。コイン表とコイン裏のデザインが同一方向の場合：0°もしくは12h、コイン表とコイン裏のデザインが逆さまの場合：180°もしくは6hという表現をします」。

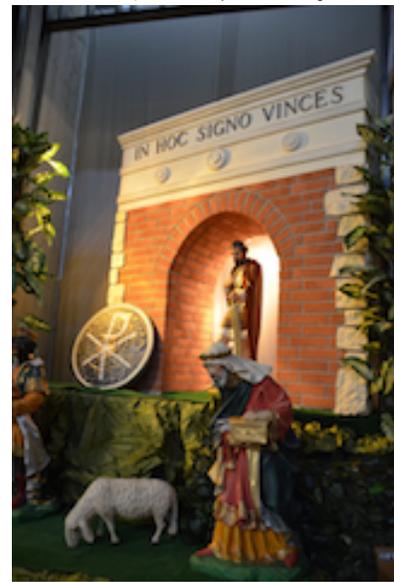
(註7) 詳しくは、cf., Victor “Tory” Failmezger, *Roman Bronze Coins from Paganism to Christianity 294-364 A.D.*, Washington D.C., 2002, p.74。

(註8) 詳細は、cf., Failmezger, *op.cit.*, p.56-79.また以下も参照、P.V.Hill and J.P.C.Kent, *Late Roman Bronze Coinage A.D.324-498*, London, 1976。地図も後者による。

(註9) Ed. by J.P. C.Kent, *The Roman Imperial Coinage*, vol.VIII, London, 1981, p.448 では、本品はコンスタンティノポリス都市落成記念の特別発行で、発行年330年、直径13~14mm、重さ1.00g、としている。これが標準的なデータ表示であるが、継続発行への視点は欠如している。

(註10) cf., D.L.Vagi, *Coinage and History of the Roman Empire c.82 B.C.- A.D,480*, vol.II:Coinage, Sidney/Ohio, 1999, p.530f.; cf., J.P.C.KENT, *Urbs Roma and Constantinopolis Medallions at the Mint of Rome*, in:R.A.G.Carson and C.M.Kraay(eds.), *Scripta Nummaria Romana: Essays Presented to Humphrey Sutherland*, London, p.13.

(註11) 2012年末にプリマ・ポルタを訪問した時、国鉄駅から降りてリウィアの別荘に向かうと、すぐモダンな建築の小教区教会があり、正面外壁上部に晴れがましく例の「ラファエロの間」の十字架幻視の布製巨大ポスターが貼られていた。それにひかれて聖体訪問してみると、いかにもご当地らしくプレゼピオの隣に、マルボーゲットの四面門とキー・ロー印の盾が飾られていた。中に立っているのはコンスタンティヌスか。



(註12) そのつもりで検索すると以下のようなものもヒットした（すでに消えているが）。



(<http://hallowedground.wordpress.com/2007/10/24/in-hoc-signo-vinces/>)

右の右端の肖像は、ローマのサン・ジョバンニ・イン・ラテラノ大聖堂の玄関間、向かって左隅に安置されている立像から採られている。他の肖像写真は、教皇スルヴェストロ(?)とピウス10世。

(註13) Cf., Colin O'Connor, *Roman Bridges*, Cambridge UP., 1993,p.64.

## 2) 切手 (註14)

コンスタンティヌス大帝のミルウィウス橋勝利(312年)とミラノ勅令発布(313年)の1700周年記念を祝賀する切手として、イタリア半島内のイタリア共和国、バチカン市国、マルタ騎士団、サン・マリノ共和国はいうまでもなく、コンスタンティヌスの生誕地(属州モエシアのNaissos: 現ニシュNiš)を擁するセルビア共和国、それにアドリア海東岸のボスニア・ヘルツェゴヴィナ、モンテネグロ、さらにはルーマニアのものも入手できた。換言するなら、イタリア以外のイギリス・ドイツ・フランス・スペインといった主要西欧諸国での記念切手発行を筆者は確認できていない。ここに各国の温度差をみてもあながち的外れではないだろう。

### a) バチカン市国、イタリア共和国

なにしろ、バチカン市国サン・ピエトロ大聖堂の玄関間の向かって右端にはコンスタンティヌス大帝騎馬像(1669年、G.L.ベルニーニ作)が、左端にはカール大帝騎馬像(ca.1730年、A.コルナッキーニ作)が、現在でも麗々しく飾られているわけで、コンスタンティヌスの「偉業」はカトリック教会にとって決して些細な存在ではない、はずである。現在は警備員の制止に邪魔されて近寄れず、またガラス扉の木枠が撮影にじゃまなので、ウェブで拾った画像を掲載しておく。関連で言及しておく、この騎馬像、かつてのイタリア共和国紙幣5万リラ札の裏側でも、隣接するScala Regiaの図案と共に、使用されていた(表側の肖像は、言うまでもなくベルニーニである)。



コンスタンティヌス大帝騎馬像



カール大帝騎馬像

(<http://www.backtoclassics.com/gallery/gianlorenzobernini/constantine/>)



まず2012年に、バチカン博物館内ラファエロの間のフレスコ画のミルウィウス橋勝利記念部分（Giulio Romano作）を描いた切手シートが、イタリア共和国とバチカン市国でジョイント発行された。左がバチカン市国発行4.40ユーロ切手シートで、イタリア共和国版1.40ユーロのほうは、まったく同一図案で、しかし色目が青っぽく印刷されている。下図右はその切手部分（<http://www.francobolli-italia.it/content/emissione/2012/21>；以下、著者未入手の場合のみサイトを明記する）。



そして、2013年には、バチカン市国発行ミラノ勅令発布記念切手として、ローマのサンティ・クアットロ・コロナーティ教会のサン・シルヴェストロ礼拝堂内壁を飾る有名なフレスコ画からとられた四種類の切手が発行されている。額面価格順に列挙すると、0.70ユーロ（教皇シルヴェストロによる大帝洗礼図）、0.85ユーロ（教皇への教皇冠・儀式傘の寄進図）、1.90ユーロ（下左のシート：二大使徒肖像画顕示図）、2.50ユーロ（ローマ入城図）。どうやら本品もイタリア共和国とジョイント発行のようで、1.90ユーロ切手がみつかった（下右）。やはり色目が若干青っぽく異なっているようだ。



（<http://www.francobolli-italia.it/frontpage>）



b) マルタ騎士団



バチカン博物館内「ラファエロの間」のフレスコ画からの、宿営地 Malborghetto での十字架幻視場面 (Giulio Romano作) を描いている切手シート (上記左の2.50と5.20ユーロ切手)。別に、その両切手部分をつないで切り取った2.40ユーロ切手 (上記右) もある。



もうひとつミラノ勅令発布関連で、先述のバチカン市国とイタリア共和国の切手と同じく、サンティ・クアットロ・コロナーティ教会のサン・シルヴェストロ礼拝堂フレスコ画からとられた切手シート（1.90と2.60ユーロ各2枚）もある。

### c) サン・マリノ共和国



このシートの群青色を背景に金地で描かれているのはミラノの市街平面図。中央に、2.50ユーロ切手が2枚あって、左側がミラノ大聖堂正面青銅製左小扉上のコンスタンティヌス（左）とリキニウス（右）の彫像が印刷され（下記、i）参照）、右側が羊皮紙に描かれたヨーロッパ地図と、最初のキリスト教シンボルを打刻したとされる315年製銀貨の表側（註15）。

### d) セルビア共和国

ミラノ勅令発布記念で2種類発行している。ここでは50パラ切手と、112パラのシートおよびそれを別あつらえの封筒に貼り付けたものがある（下記掲載は後者）とを示す。





セルビアは、コンスタンティヌス生誕地に目されるナイッソスを擁しているもので、それなりに力を入れていて、しかも封筒の裏面の解説によると、1913年にも国家レベルで記念行事をおこない、今回も教会サイドのみならず、国家レベルでも各種の催しをニシュ、VIMINACIUM、そしてベオグラードで実施した。上記の切手の肖像には、現在、首都ベルグラードの国立博物館所蔵のご当地ものを採用。それに対し、シートの背景は当時の地図で、そこには他の地名と共に Naissus と Mediolanumが表記されている。イタリア半島上の大帝肖像は、ローマ・コンセリヴァトーリ宮殿中庭のもので、かつては彼のバシリカに設置されていた。ただ、左目の破損がここでは右目なので、イタリアでもよく見かける左右逆転画像を誤って採用したようだ。



切手



実物

### e) ボスニア・ヘルツェゴビナ連邦

いずれもミラノ勅令発布記念の150ペニガー切手2枚のシートと、90ペニガー切手がある。後者の左側背景はコロッセオとコンスタンティヌス凱旋門で、そこに勅令文面のさわりがラテン語とおそらくボスニア語で重ねられている。以下3点のコンスタンティヌスの肖像は、いうまでもなくローマ・コンセリヴァトーリ宮殿中庭のもの。ここでの顔（両目）の向きは正確。



f) モンテネグロ



これもミラノ勅令発布記念切手、0.30ユーロ。

g) ルーマニア共和国 :



ルーマニア正教会は2013年を「聖コンスタンティヌスと聖ヘレナ」記念年と宣言し、各種の記念行事をおこなった ([http://basilica.ro/stiri/bi2013\\_anul\\_omagial\\_al\\_sfintilor\\_imparati\\_constantin\\_si\\_elenabi\\_8752.html](http://basilica.ro/stiri/bi2013_anul_omagial_al_sfintilor_imparati_constantin_si_elenabi_8752.html))。その一環の記念シールと切手である。4.70、9.10レイの切手には、こういう場合よく見られる特別の記念スタンプが押されている。皇母聖ヘレナで想起するのは、彼女の聖地巡礼でエルサレムでの聖十字架等の聖遺物発見、その聖所の上に聖墳墓教会が建設され、それが326年ごろだったことである。

以上、要するに上記 d)、e)、f) の欧州連合未加盟国ないし潜在的加盟候補国（ルーマニアはブルガリアと共に2007年に加盟を果たした）が、コンスタンティヌス大帝のミルウィウス橋勝利・ミラノ勅令発布年を相変わらず熱心に記念しているようで、気になった。自分たちが加盟したいがための、キリスト教国へのすり寄りなのかもしれない、と。

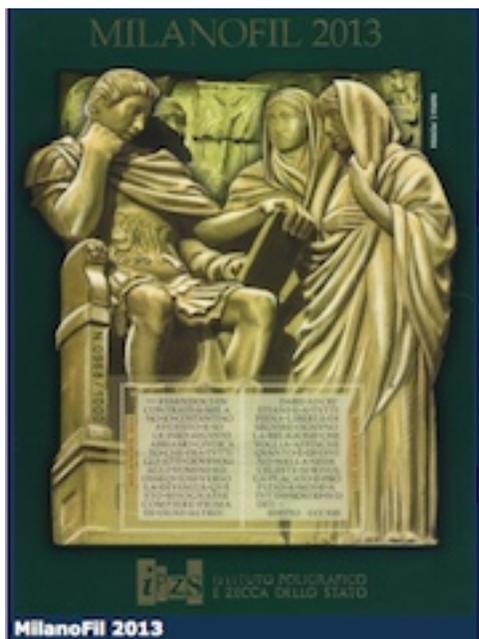
**h) 切手探査の過程で、ブルガリアの、ガレリウス勅令**（311年に属州ダキアのセルディカ：現ソフィアで発布）**1700年記念切手シール**も転がり込んできた（切手の額面は0.65レヴァ：背景は城壁に囲まれたセルディカ）。さしずめ、ミラノ勅令に先行するこっちのほうがキリスト教迫害撤回勅令としては先輩だ（ラクタンティウス『迫害者の末路』xxxiv.1-5；エウセビオス『教会史』VIII.17）、という自意識からなのだろう。この主張はそれなりの根拠がある（註16）。



しかも、研究者レベルでは「コンスタンティヌスとリキニウス」が「ミラノ」で「勅令」を発布した、という人口に膾炙した通説はすでに疑問視されてきて久しいのだから、なおさらだ。史料的には、ラクタンティウス『迫害者の末路』（xlvi.2-12）が、「リキニウス」が「ニコメディア」で「書簡」を発信したとしているが、それをエウセビオス『教会史』（IX.ix.12-ixA）は、「コンスタンティヌスとリキニウスから発信された法令」（下線筆者）とさりげなく修正し、それに触発された「マクシミヌス・ダイア」が発令した「書簡」を転写しているに過ぎない。すなわち、肝心のコンスタンティヌスの関与の程度は、実は闇の中なのだ（註17）。筆者はここに最終勝者への功績の意図的集中の作為を感じざるをえないのだが、どうだろう。

i) イタリア共和国の国立造幣印刷局 Istituto Poligrafico e Zecca dello Stato 発行の「Milanofil 2013」

これは記念切手シートとのこと。ここでも切手部分には額面が書いてないが、地名に「-fil」と西暦年を付したシートがこのところ毎年2~4点、価格6ないし9ユーロで発行されている。实用よりもコレクター用なのだろうか。双折りの紙ファイルで保護されている。なお、この施設はバチカン市国、サン・マリノ共和国、マルタ騎士団の切手印刷業務を委託されている由。



上記シールは2013年に発行され、切手の下部にいわゆる「ミラノ勅令」のさわりの部分がイタリア語訳で引用されていて、そこが2枚の切手となっている（註18）。

ところでこの原図は、ミラノのドゥオーモ正面左端入口の青銅製扉（ユダヤ系彫刻家 Arrigo Minerbi [生没年：1881-1961年]、1948年製作）の左右各々7面のパネル装飾の、上から4段目の「INSTINCTV·DIVINITATIS」（神格の導きで）と題された一対から採られている。かの文言はいうまでもなくローマのコンスタンティヌス凱旋門銘文中のもの。



↑ ここ

(<http://www.flickr.com/photos/kkmedia/5070413426/in/faves-sundaygreen/>)



(<http://www.panoramio.com/photo/10162774>)

左扉からみると、左端が座像のコンスタンティヌスと群像、中央が信教の自由を宣言したイタリア語訳勅令の一部、右が磔刑者2名、右扉はそれと対照の配置で、左に磔刑者と処刑吏、中央がイタリア語訳勅令の一部、右端が群像と座像のリキニウス。製作者のミネルビは1937年に製作を依頼されたものの、戦時中は人種差別の迫害を避け、戦後になってこの作品が世に出たことを想起すると、この構図と内容は実に意味深長である。そもそもリキニウスを勅令発布の一方の当事者として、コンスタンティヌスと同等に登場させているのは、なぜなのだろうか。未だ歴史研究者がコンスタンティヌス・プロパガンダに踊らされ、政敵だった彼をきちんと評価していない現状を顧みれば、芸術家ミネルビの非情なまでの直感力の冴えに脱帽せざるをえないだろう。

ところで、切手での彫像画像は下からの撮影のせいか、皮肉なことにファッション的マチスモを彷彿させているように見えてしまうのは、筆者だけであろうか。製作者にとって当然それも計算のうちだったのだろう。上掲c)でも同様のアレンジ。

どうやら理想は永遠の課題で終わる運命のようだ。ミネルビはそれを知っていた。

(註14) 歴史資料に直結するわけではない切手収集のきっかけとなったのは、イタリアの月刊誌 *Archeo*, 341, 2013/11, p.16 掲載の Luciano Calenda, 'Archeo Filatelia : L'imperatore dell'editto' だった。それに刺激されてウェブ検索していて、*Filatelia Religiosa Flash*, 2013/6, N.57 掲載の、Luigi Mobiglia, 'Editto di Milano', のpdf論文 (<http://www.filateliareligiosa.it/database-pdf/finish/13-festivita-ed-eventi-sacri/739-editto-di-milano.html>) も見つけることができ、大いに裨益した。

(註15) 拙稿「歴史研究は刷り込みとの闘い：後三一五年ティキヌム造幣所打刻「記念」銀貨をめぐって」上智大学文学部史学科編『歴史家の窓辺』上智大学出版会、平成25(2013)年、pp.203-220。

(註16) 拙稿「『ディオクレティアヌスのキリスト教大迫害』勃発原因をめぐって(一)：問題提起——ガレリウスの『キリスト教迫害撤回告示』——」『上智史学』37、平成4(1992)年、pp.235-259。

(註17) 後藤篤子『『ミラノ勅令』をめぐって：クリステンセンの復原を中心に』『法政史学』39,1987, pp.1-22。

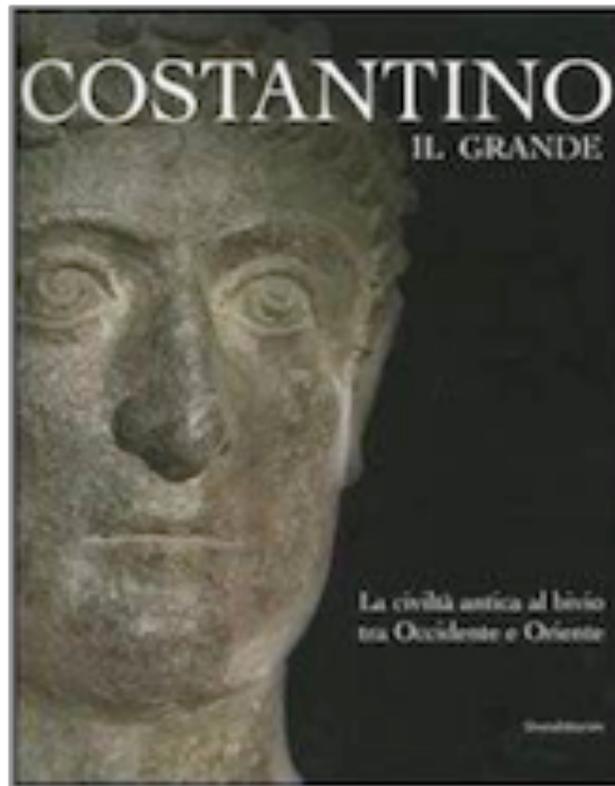
(註18) シートの大きさは横幅15.5cm、縦20.5cm。切手の大きさは4cm×4.8cm。ちなみに入手シートのナンバーはN.0227/1000で、玉座の脚部分に刻まれている(すでに品切れのようだ)。ちなみに、同時に入手した2010年のAra Pacisが0903、2003年のPantheonが0402。cf.,<http://www.libreriaipzs.com/PagineD/Catalogo.asp?ID=92>

【追加情報】2014/6/3 発信の「キリスト新聞」のヘッドラインで、教皇フランシスコと正教会総主教バルトロメオ1世が、2025年にニカイア(現イズニク)での合同公会議開催に合意したというニュースが飛び込んできた。予想された地中海規模の動きが早くもその一步を刻みだしたようだ。成功を祈りたい。

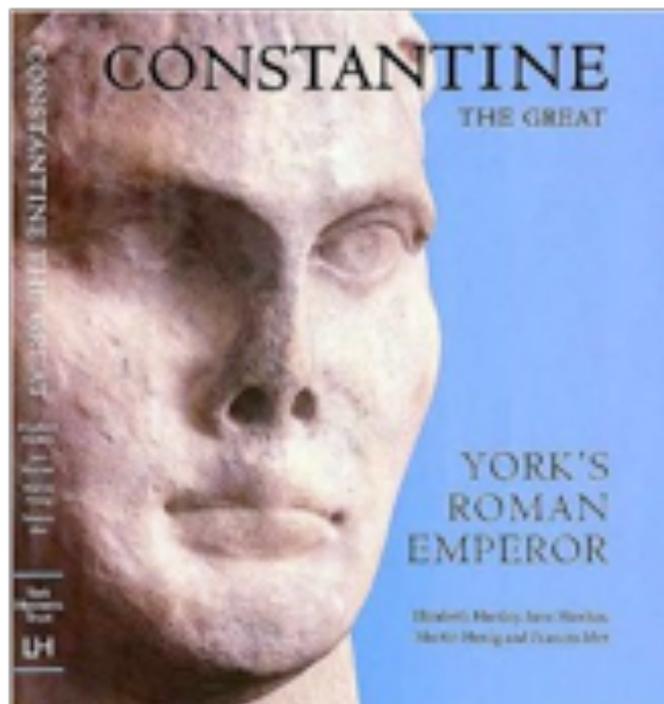
<http://www.christiantoday.co.jp/articles/13426/20140603/2025-nicaea.htm>

## 「補遺：展覧会カタログ関係紹介」

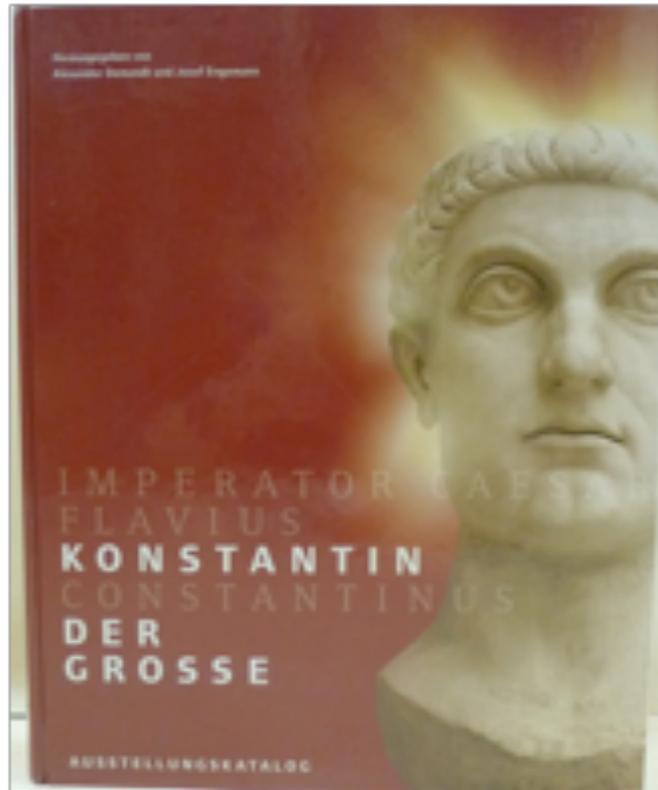
Riminiでの展覧会カタログ



Yorkでの展覧会カタログ



Trierでの展覧会カタログ（の一つ）



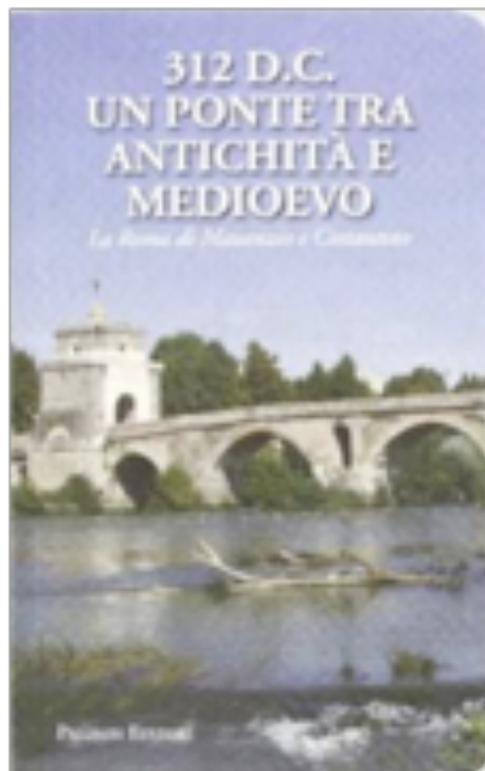
Milanoでの展覧会カタログ



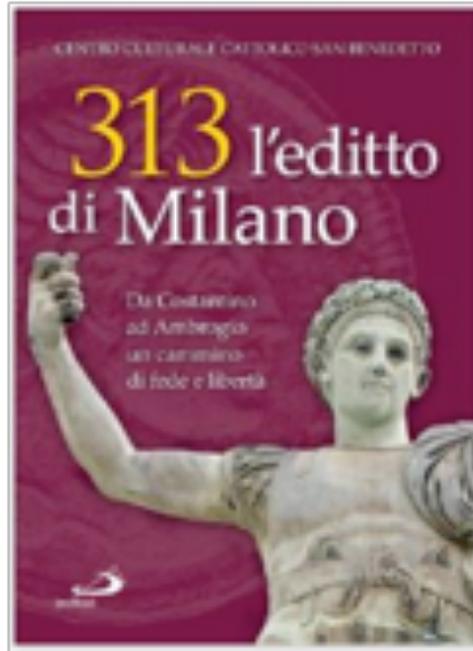
RomaのColosseoでの展覧会カタログ



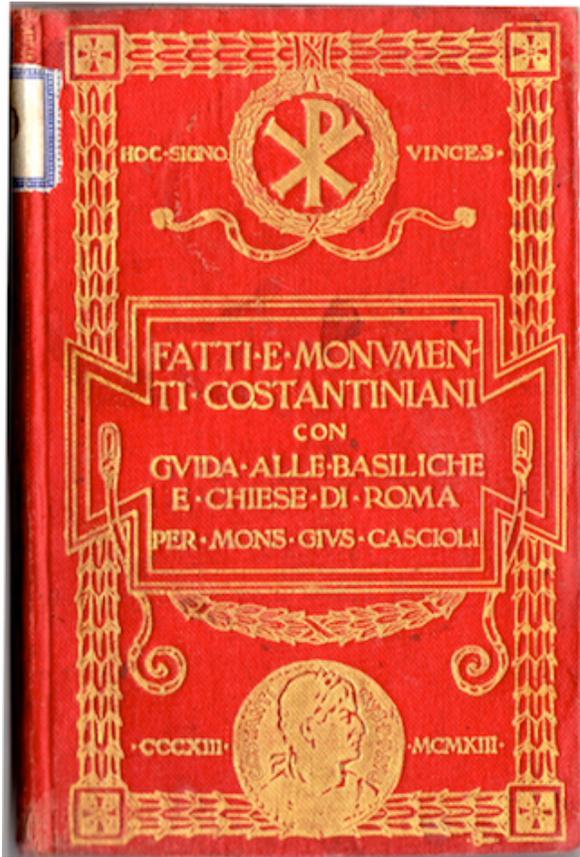
ローマでのコンスタンティヌス遺跡のガイドブック



ミラノでのコンスタンティヌス遺跡のガイドブック



100年前に記念発行されていたガイドブック（古書入手）



このころは教皇庁認可のもとで発行されていた。そういう緊張した時代だった。

(2014/3/27 成稿 6/11 付加修正)